久し振りの休日、久し振りの日本。
初めて訪れた、見知らぬ街。
今日は暑くも寒くもなくて、外でお茶を楽しむにはもってこいのお天気。
目の前には、この辺では有名らしいオープンカフェの季節限定 春いちごのスペシャルショートケーキと、ほわほわ湯気を立てている蜂蜜とミルクたっぷりのカフェオレが並べられていて、早く食べてとオレに誘いを掛けてくる。
とっても幸せな、何気ないひとときの時間。
だけど――

「……ハァ」
ディーノは僅かに伏せていた顔を上げ、テーブルの向かいの空席を恨めしそうにチラッと見やると、静かに溜息を零した。
いつもなら、こんな時は満面の笑みで幸せそうにケーキを頬張っている彼女だが、今は少し様子が違っていた。
フォークを手にしているもののケーキにはほとんど口をつけておらず、俯き加減でモジモジそわそわしている。
その顔はやや赤く、端から見たらトイレでも我慢しているかのように見えたが、周りにそれを気に留める者は誰もいない。

だがディーノは周囲の人々の目が気になるのか、時折顔を上げてはチラチラと辺りを見回し、また膝元に視線を落とす、という動作を先程から何度も繰り返していた。
（ダ、ダメだ……こんなんじゃ変に思われて、却って注目受けちまう。もっと普通にしてなきゃ、普通に……）
胸中でそんなことを呟きながら目を瞑ると、ディーノは傍目に悟られない程度に深呼吸をし始めた。
そして心が落ち着くのを待ってからゆっくりと目を開くと、フォークをそっとケーキに差し込んだ。
まだ少し手が震えていたが、それでも何とか端っこを小さく切り取り、口元へと運ぶ。
「ん……」
いつも通りぱくんと口に含みモグモグと咀嚼するが、美味しいはずのケーキの味は何故か少しも感じられなかった。
口の中のものをゴクンと飲み込んでからもう一口運び、今度は舌の上でじっくり味わってみる。
しかし、生クリームがふわっと溶ける感覚も、頬を蕩けさせてくれるような幸せな甘さも、今は全く何も感じられなかった。
（……やっぱこんな状態じゃ、味なんて分かんねーや）
ディーノは諦めたようにふぅ、と息をついて持っていたフォークをケーキ皿に置くと、俯かせていた顔を上げてゆっくりと周りを見渡した。